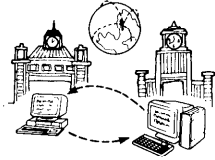


巻頭言



ソフトの時代？

森田 修三†



先ごろ法隆寺宮大工の西岡常一氏が亡くなった。法隆寺金堂の解体修理や薬師寺西塔再建に携わった方である。西岡氏は著書「木に学ぶ」の中で、千数百年を経ていまだその美しさと頑強さを保っている飛鳥様式の建造物の秘密を、職人の立場で分かりやすく解説しておられる。それを読んで印象に残るのは、素材と道具に対する職人のこだわりである。「木は二度生きる」、「木を買わず山を買え」、など自然の木の性質を知り抜いた飛鳥人の知恵が世界に誇れる建造物を生んだこと、また、「研ぎ三年」と言われる職人の原点、法隆寺に残っていた古釘を鋳つぶしてヤリカンナを作ることによってヒノキを削る最適な道具を得た、など、道具を命とする職人の強いこだわりを説いておられる。飛鳥時代以降の道具の高度化が必ずしも建築技術の進歩に結びつかなかった、かえって質の劣化に繋がったという興味深い記述もある。

我々が携わる情報処理の世界はその本質を語るにはあまりにも歴史が浅いが、西岡氏が語る古代建築にも学ぶことが多いように思う。特に、ソフトの時代と呼ばれる今日、素材、道具としてのコンピュータに対する理解とこだわりについて、もう一度考えてみる必要があると思う。

情報処理技術の進歩は、コンピュータを素材、道具として利用する新しい分野の開拓に大きく貢献してきた。大きなカードラックを運んでバッチ処理の待ち行列に並んでいた一昔前のことを思えば、信じられないような変わりようである。技術の進歩は、本分野に携わる人の人口を増やし、ある意味で技術の「大衆化」に貢献してきたとも言

えよう。しかし、逆にそれが本分野の研究・開発者の甘えを生んでいることはないだろうか。素材、道具としてのハードやソフトのプラットフォーム（基本システム）は常に与えられるもの、という安易な割り切りがないだろうか。

一般に新しい応用は新しいプラットフォームを必要とする。今普及しているプラットフォームは、何年か前に想定された応用を対象として開発されたものであり、新しい応用には必ずしも適さない。先進的な応用の開発者はプラットフォームに対し何らかの不満を持っているはずである。同時にプラットフォームに手が出せないことに対するジレンマに陥るのが常ではないだろうか。

プラットフォームを開発・普及させるには大変な努力が必要であり、技術だけで解決できるものとは思わない。しかし、その困難さに屈し、ジレンマ解決の努力を放棄してしまえば、本当に素晴らしい応用は生まれないし、我が国からオリジナルのプラットフォームを生み出す事は出来ないだろう。前述の西岡氏のように自らが道具をチューニングするのは難しいとしても、少なくとも応用レベルで仕事をする人もプラットフォームに対する理解を深め、それを改善するための声を伝える努力を惜しんではならない。

本学会の論文投稿数の分布を見ると、基本システム関係が多少寂しい印象を受ける。ソフトの時代と言われることが、プラットフォームを自らが変えてゆくことに対する諦念から来るものでないことを信じたい。我が国の情報処理分野をリードする会員諸氏の一層のご努力に期待する。

(平成7年9月30日)

†本会事業担当理事 (株)富士通研究所